

横浜市立大学論叢人文科学系列 2018年度：Vol.70 No.1

朝河貫一『明治小史』¹

—その2、日清戦争と東アジア

矢 吹 晋

第4章 日清戦争 1894～1895

東アジアの国際関係史上、1894～1895年の日清戦争や1900年の義和団事件、そして1904～1905年の日露戦争ほど劇的なものは滅多にない。これらは継続して拡大した一連の状況ではない。この展開場面には、現在、世界で最も機略に富み、人類の3分の1を含む諸国を含んでいる。将来は未知である。しかしながら、ドラマの起源は、少なくとも日本が新しい歩みを始めたことと少なくとも部分的には関わっている。過去の長い歴史で目立ってよく訓練され、枢要部の権利によって強制されてきたが、日本は断固として新しい生活に踏み込んだ。そして国家として存在し、成長するために開放と進歩の政策を義務づけられ、後戻りできない地点から一步一步と歩み、あらゆる障害を乗り越えてきた。

日本の生活様式の変化が日清、日露両戦争の原因となり、それによって東アジアの歴史は急激にその性格を変えて、新しい巻の始まりとなった。新日本が決定していた当初の姿勢は、まもなく1894～1895年の戦争が必然的な結果としてもたらされるほどに拡大して履行できなくなった。清国は師であり、韓国は最も偉大な生徒だったが、日本は一度も根源の特性を開発しないような独創性のない弟子だったことはなく、古代の東アジアの文明から自分を引き離したことは、すぐに表れた。日本が西洋の芸術と科学

¹ 訳者による訳注は「……」で示した。朝河貫一による原注は（……）で示した。挿入した図表は、すべて英文版のものをそのまま用いた。

に受容的なことが判明すると、憤りが清国と韓国側に生まれた。彼らはまるで日本が東洋の歴史的共同体を見捨てて裏切り者となり、野蛮人の劣った文明となったように感じた。無意識に日本が望んでいたのと等しい程度の新しい生活は指導を誤らなかっただけではなく、東洋をも救い、自国を保持する唯一の可能な方法であったのだ。清が宗主権を主張している固く閉ざされた韓国の王国を、世界に開くように日本が望んだとき、清国との闘争は激化した。韓国を開国・近代化へ導く日本の試みは、1894～1895年戦争の説明の始点としてとらえるべきである。我々の全体的調査を完成するには、同じ問題を強調すべきである。すなわち、1894年の不履行と1904年の衝突を生み出したものはなにかである。この10年の間にかかわっている利害は、より大きくより深くなった。ロシアは清国よりもはるかに強力かつ攻撃的であったが、しかし、日本の立場から見ると、1904年における重大な利害は1894年のそれと同じく、紛争は門戸開放か排他的な政策かをめぐるものであり、世界における問題であるという事実のままであった。

上述のように、独立した主権国として韓国を開放するという日本の試みが、1894年の清国との戦争勃発の契機だった。日本はなぜ韓国の開放を望んだのか。日本自身が合衆国と他の国から受けた扱いを韓国に適用したのであろうか。それとも、新たに再編された国家の活力の表現だったのか？おそらく動機はそれほど単純ではない。前史時代から日本と韓国の歩みは深くからみあってきたので、その密接した関係は地理的な近さと同じくらい不可避であることが想起されるべきである。そのうえ、半島の向こうには二つの国、すなわち清国とロシアがあった。日本はこれら両国の友情をいつも当てにすることができなかった。これらの国からの、ありうる危険に備える際に、問題全体が韓国で決まるように見えた。というのは、韓国が敗北するならば日本の存在が脅かされると見えたからである。日本自身を守るには、韓国が強国の犠牲となる前に併合するか、あるいはその資源を開発し、腐敗した行政を改革することによって効果的な独立を確実にすることが、日本にとって肝要のようだ。日本は後者を選択した。しかし、

これは韓国人との衝突を招いた。それは、清国文明を徹底的に吹き込まれ、官僚はあまりにも深く腐食されていたので、韓国を近代的にして復活させようとする日本の熱意に同意しなかったからだ。つまり、韓国は独立と力を保証するための友邦の提案に対して抵抗する姿勢だけを提示した。日本は韓国の誤解を解き、半島に対する清国の宗主権を打破しなければならないという巨大な課題に直面した。この二つの闘いは、日本で皇室の権威が回復するやいなや始まった。1868年、日本は韓国にメッセージを送り、友好関係の始まりを提案した。しかしながら、韓国は日本で起こった政治上の変化の性質を正しく知らされず、さらに清国が日本の攻撃性についての嘘を伝えたので、日本の歩み寄りを受け入れることをきっぱり拒否した。他の類似の試みも失敗し、1872年に、韓国の行政長官は釜山で日本人将校の住居の門にプラカードをかけた。そこでは、日本は野蛮な習慣を奴隷のようにまねする世界の笑いものとして嘲笑された。強烈な皮肉は、日本は韓国に恥知らずな政策を押しつけるほど横柄だが、韓国はすぐれた礼節を持つので惑わされないという言葉で終わった。ここでの反論が二重性をもつことに着目したい。日本は他国の影の下にいて国家的独立を失いつつあり、そして韓国に迫って賢明ならざる例にしたがわせようとしたことである。前者は十分いとわしいものであり、後者は堪え難いものである。1873年に交渉を求める日本に対して韓国が繰り返し侮辱したことについて日本が清国の説明を求めたとき、「韓国の行為であるから清国は答えられない、韓国は従属国ではない」と清国政府は述べた。これは日本の激しい抗議を引きおこし、韓国を独自に開国するよう強制したが、韓国からはより大きい侮辱が返ってきた。1875年8月、日本の戦艦が牛莊への途中、江華島（済物浦から近い）に停泊したとき、住民から発砲されて、2人の船員が死んだ。この事件の結果、結ばれた日韓条約は、特に注目に値する。それは、韓国が外国と結んだ初めての条約であるばかりではなく、韓国に対する日本の政策が初めて明確に示されたからである。そしてこの政策が、長期にわたり極東の歴史における多くの重大事件に関わるのである。この条約に

よって韓国は独立を宣言し、互いに平等を基礎とすること、外国貿易のために三つの港がすぐに開かれることになった。この画期的な条約は1876年2月26日に結ばれたが、この日付をもってついに韓国は協定上独立し、外部世界に部分的に開かれた。日本政府の穏健な韓国政策が引き起こした強い国内的反発や、内政における広範囲の帰結についての話を繰り返す必要性はない。ここで興味深いのは、条約が韓国自身にどのような効果をもたらしたのかであり、韓国の主権を条約が疑う余地もなく認めたことである。韓国の条約上の独立は、韓国の政治上の精神をなんら変えなかった。韓国は有史以来、より強い周辺国に囲まれて生存してきたという見方で訓練されてきた。強国はなだめるか、それとも両者を対立させて不安定のなかに安全を求めるか、しかなかった。かくて韓国人は習慣として、そして確信として日和見主義的国民に育成された。日本が韓国の願望を入れて独立を宣言したことには感謝したが、同時に、中華帝国へのあいまいな依存を維持することによって、清国の機嫌をとった。清国は韓国が自国に従属すると同時に従属しないという、あいまいな主張を支持した。しかしながら、清国が韓国への宗主権を特定するに及んで、半島への主権を繰り返す。深刻な危機に見舞われた清国は真意を隠したあいまいな言い回しを突然捨てた。1882年に韓国王の父、大院君がソウルの行政権を握り、排外方針を厳しく実行しはじめた。明治維新前の多くの日本人のように、古い愛国者からみると、排外主義と独立は同義だった。7月23日に日本の公使館は韓国軍に攻撃され、27人の館員は済物浦を経由して、イギリス船で辛うじて日本に逃げ帰った。異例の速やかさで、北京政府は韓国に兵力を送り、大院君を捕らえ、北京に連行した。韓国に対する強制的介入の権利をみせつけるためであった。清国はこのような行動を通じて韓国に対する主権を示し、両国ともまだ予期してはいなかったが、日本との究極の衝突をすでに予見させていた。日本側は犯人の処罰と、死傷者に対する5万円の見舞金および50万円の賠償金の支払いを受けることで満足し、そのうち5分の4は翌年に支払われた。日本はさらに将来の非常時に対して日本の居留民を保護

するため、ソウルに駐屯軍を派遣することを許された。

1882年の韓国での軍乱の2年後により大きな危機が到来した。今回もソウルの政治上の騒動だった。1884年、清国が安南でフランスと交戦したとき、韓国の進歩派が日本の例に鼓舞されて、親清国の保守的な政府を覆した。敗れた党派は突然、2000人の清国軍と共に宮廷に侵入し、新内閣の数名を殺害し、日本の公使館に放火した。竹添〔進一郎〕〔弁理〕公使は逃れたが、ソウル駐在の同胞の多くが暴行され、あるいは殺された。宮廷を守るために日本人の軍人を呼び出していた王は、まもなく清国人の保護に身をゆだねた。日本では事件の原因は政府の寛大な韓国政策のせいにされた。1885年に韓国との協定が結ばれ、韓国はもう一度犯人を処罰し、暴行に対して賠償することを約束した。韓国が片づいたので、今度は、清国対策を取ることとなった。国民から自分に向けられた問責を鎮めるために、伊藤〔博文〕は個人的に清国に出向き、清国人の長官、李鴻章と、後の1894年に清国が破談にした有名な1885年4月18日の天津協議を行った。この協議で日本と清国は、韓国から軍を撤退させること、韓国に軍事顧問を送らないこと、将来必要が生じた場合に日清両国のどちらかが韓国に出兵する場合、相互に事前通告をすることが合意された。補足ではさらに、清国軍がソウルで日本人居住者を殺したという確かな証拠はないが、将来十分な証拠が得られた場合には犯人は処罰さるべきである、と述べられた。実際には、どのような調査も続けられず、またどのような処罰も行われなかった。これに反して、袁世凱（いまや有力な親日の直隸省都督だが、当時は韓国における清国の優位性を主張する対日強硬派であった）は、ソウルの清国弁理公使が清国軍の行為において大いに責任があると考えられていたにもかかわらず、彼を呼びもどすどころか、ソウル公使として復職させた。しかしながら、日本国民が最も不満を感じたのは、1882年に獲得された、市民とその利益を保護するためにソウルに軍を駐屯させる権利を放棄する協定の条項であった。その結果、伊藤は国内で以前にもまして声高に非難された。清国側でも協定への不満が出た。というのは、韓国における日本の地

位が清国と同じになったからである。両国とも等しく苦しんだ。日本はすでに得た権利を没収され、清国の宗主権はひどく損なわれたからだ。この緊張状態はその後9年続いて、1894年、予期もしなかった事件が緊張を打ち破った。それは東学党の乱であり、韓国において日本軍と清国軍を対面させた。東学^{トンハク}（「東から学ぶ」）党は秘密結社であり、その教義は儒教、仏教、および道教の教義をあつめたものであった。この党の実際の目的も真の実力もほとんど知られていない。しかしながら、1894年の行動は国際的危機を招いたが、その危機はいささかも予想されていなかった。5月に閔妃一族の強力な支配下にあった韓国官僚の広範な腐敗と抑圧に対して、社会的暴動がおこった。このように安全を脅かされた閔氏は、宮廷における反対にもかかわらず、転居を勧めたソウル駐在公使を通じて清国の援助を求めた。清国にとってこれは長らく待った韓国における失地回復の機会であり、再度半島での宗主権を主張した。北京政府は直ちに韓国に兵力を派遣し、同時に日本にこう通告した。天津協定にしたがい、清国は韓国の要請に基づいて軍隊を派遣し、東学党の乱を鎮圧する。韓国は「属国を保護する」ことに同意している。同じ6月7日、日本は二つのメッセージを伝えた。一つは清国の通告は受けとったが、韓国が清国の属国であることは認めないもの、もう一つは日本も韓国に軍隊を派遣するというものであった。清国はこう反駁した。日本は韓国から軍隊派遣を求められていない、軍隊派遣の目的は半島における日本臣民の保護であり、そのためにはかくも大量の軍隊を内部にまで派遣する必要はないはずだ、と。日本は、1882年の韓国と日本の協定に従って軍を派遣するのであり、兵力の数と用途は日本自身が決定する権利をもつと答えた。大鳥〔圭介〕公使を護衛した最初の日本軍分遣隊は6月10日にソウルに到着し、清国軍の牙山到着は翌日であった。もし到着の順番が逆であったならば、清国は少なくとも一時的には、韓国王朝に対する主権を回復できたであろうし、韓国を改革し、独立国として強化する日本の願望は実現しなかったであろう。しかしながら、その優位な立場から、日本は実際には危機を生む行動をとった。6月17日、

陸奥外相は東学党を共同で鎮圧し、王朝の安定と平和を保証するために韓国の内政を共同で改革しようと提案した。韓国行政の諸悪を根絶する際、日本の手を握ることによってすべての危険を避けるかどうかは、清国にかかっていたが、しかし清国国内は受け入れようとせず、韓国に改革を迫ることはしなかった。それどころか、韓国が腐敗し、弱ければ弱いほど、清国に依存すると見た。したがって、ためらうことなく北京政府は、反乱はすでに鎮まったので共同鎮圧は不要であると答えた。韓国に対する清国の宗主権が脅かされるので、共同改革は受け入れられなかった。そこで清国と日本に残されたことは半島から撤兵することだった。

清国政府のこの回答が状況を決定したといえよう。というのは、それ以後、日本は韓国において独自の行動方針をとるからだ。日本は6月22日に次のことを清国に伝えた。韓国は党派争いと無秩序にたえずさらされており、独立国としての義務を果たせない。日本は韓国と近くて重要な経済関係をもつので、この状態は日本の利益を著しく損なっている。事態を放置することは、韓国に対する日本の友好的態度に反するだけでなく、韓国自身の保全にも反する。したがって、改革を停止することはできないし、「将来の平和と秩序、そして良好な韓国政府を保証するとの理解なしに」撤兵はできない、と。清国との協力が不調になって、日本は韓国の改革とより良い管理を求めて、単独に行動を進めた。6月28日、ソウルの日本公使大鳥は韓国政府に、王国は独立国であるのかどうかという質問を直接ぶつけることによって、その政策の実行に着手した。この先鋭的な質問はソウルの政治家を深く当惑させたように思えた。というのは、彼らはすぐに以下のような三つの意見に分かれたからだ。第一は、韓国はもちろん独立国であり、日本はこの事実を世界に宣言した最初の国である。第二に、韓国は歴史上清国の属国である。第三に、日本と清国双方の不満は、単に条約に言及するだけで明確に答えないことによって、逸らされるかもしれない。存在の危機に瀕した段階で、韓国の人々の政治意識の根本的弱点をこれ以上明確に暴露したものはない。日本公使の質問にどのように答えるかへの

指示を求めて、韓国は清国の李鴻章に伺いを立てた。義州^{ウイジウ}への電信回線は中断されており、韓国はかつて属国であるとともに独立国でもあるとする、あいまいな定義を再び勧告した李の回答は、3日間の討議の末に、「韓国は独立国だ」と修正することによって、ようやく日本が受け取るようになった。この最初の質問は、半島における日本外交のその後のスタンスを明らかにするために提起されたものである。専門的解釈では韓国は清国の宗主権を離脱したので、大鳥は7月3日に公的機関、財政、司法、軍事制度の徹底的な改革を示唆した。王と政府は日本公使に同意するだけではなく、改革を求める布告も発行した。18日に突然異変が起り、ソウル政府が、日本軍の存在が必要な改革を妨げると宣言した。これらの軍が去るやいなや、改革のすべての望みが失われるのは、明らかだった。異変は明らかに李鴻章の電報によるものであった。それはソウルの日本軍を粉碎するために、大軍が清国から到来しつつあるというものであった。大鳥は直ちに韓国外務省に行き、韓国側の突然の信義違反に驚きを表明し、次の二つの要求に対する回答を3日以内に求めた。一つは東学党の壊滅以後、不要になった清国軍^{アサン}の牙山からの撤兵命令について、もう一つは韓国と清国の現行条約の韓国の清国従属の条項は廃止されたという宣言についてである。政府からいかなる回答もこないまま、3日の期限が切れた。この7月2日までソウルの町は激しい興奮状態にあった。大鳥は個人的に国王と会う決意をして、23日朝早く、警備の護衛を連れて王宮に出向いた。韓国兵士が彼に発砲し、日本軍は交戦した。15分で韓国衛兵は散らされ、城門は開けられ、同日午後、首都全体が日本軍の完全な指揮下に入った。これは最初の流血であり、不幸にして流れたのは韓国人の血だった。しかしながら、韓国の抵抗はソウルの極度に不安定な政治の結果であることに注目する必要がある。そのために親清国の腐敗した閔一族^{みん}が一時的に状況を管理できたのである。その敗北によって、韓国は自然に方向転換し、日本と同盟して清国に対抗したのである。古い愛国者、太院君（国王の父）は元老として復活し、閔氏の処罰を命じて急激な政府改革を行い、清国との条約を廃棄し、

日本軍に対して牙山から清国軍を一掃するよう求めた。この要求によって両帝国の軍隊は一戦を交えた。交戦は7月29日に実行されたが、それより前の25日に、戦争の最初の行為が、海上で予期せず発生した。

この海戦について述べる前に、清国は明らかに7月16日には日本との戦争を予期していたことに注目することが重要である。中国は当初はしぶしぶであったが、韓国の独立と改革を実現する日本の努力に武力で抵抗することを決意したように見える。陸海から韓国向けの大部隊を派遣したのは、それ以外に考えられないからだ。中国は日本と対決することによって、韓国に対する宗主権を盤石にしようとした。そのためには圧倒するような軍隊が必要であった。日本では当時、中国の政治家が日本の能力を誤解したと広く信じられた。それは政府と議会の関係の特徴づけるように見える。李鴻章らは韓国に上陸するにはあまりにも日本内部が不和によって手間だと考えた。出兵には国家の蓄積が広く集まるが必要であった。すべての表面的な違いは、仮にあったとしても国家の事業の前に沈められ、深い愛国主義が無意識にかつ計画なしに全国家、政府、政党を強制してあたかも1人の人間のようにまとめることを予期できなかった。7月21日から23日までに10隻が中国軍を載せて大沽を離れ、韓国に向かった。3隻の日本巡洋艦吉野、浪速、秋津洲は23日以来、韓国水域にいたが、25日午前7時豊島島（牙山近く）で、中国巡洋艦済遠と戦艦広乙と遭遇した。これらの船は牙山から出航し、別の中国の砲艦クワンイー操江と合流し、牙山まで輸送船を護送するよう命じられていた。

2隻の中国船は日本の船に敬礼せず、日本船が南西に舳先を向けたとき、中国船が発砲した。1時間以上の活発な砲撃合戦後、済遠号は逃れ、広乙号は豊島沖の南で座礁し、そこで火薬庫が爆発した。そうしているうちに、クワンイー操江号と、英国旗を掲げた輸送船ツァオジャング高陞号が1100人の中国軍と補給品を運んでその場に現れた。ツァオジャング操江号は捕獲された。コウション高陞号は日本巡洋艦浪速から本隊まで従うよう命じられたが、乗船した兵士は大沽に戻ることを望み、イギリス人船長ゴールズワージーを脅迫した。船長は降伏して日



地図1 日清戦争の第1段階1894年

本側で用意したボートで船を離れることを望んだ。浪速号によるイギリス人の仲間を救う試みが失敗した後、午後1時、高陞号^{コウシヨン}を止めた4時間後に赤旗を掲げた。それから、船長と乗組員が飛び乗ろうとすると、中国兵が砲撃し、船長ともう2人のほかは射殺された。これら3人は浪速号のボート^{コウシヨン}に救われた。高陞号は沈んだ。ドイツ人少佐ハンネケンなど少数だけが岸に泳いで助かった。

豊島近く^{ソンホワン}の海戦で勝利した日に、大島〔義昌〕少将の指揮する4000人の旅団がソウルを出て牙山に向かい、そこに駐屯する中国軍を駆逐する命令を韓国政府から受けた。期待した大援軍が中国から到着せず、中国軍3500人は牙山の東にある戦略的要衝、成歙^{ソンホワン}で敵と遭遇した。7月29日午前3時から午前7時30分までの激しい交戦で、中国軍は次第に敗れ、死傷者500人を残して平壤に逃れた。日本の損失は死傷者88人に達した。牙山からは

中国人が完全に消えた。勝利した日本軍は8月5日早朝、ソウルに戻り、そこで凱旋を待つ韓国当局と日本人居留民から歓迎された。これらの敵対的な行為に続いて、中国と日本の皇帝から正式な戦争宣言がなされた。この宣言は次のごとくである。

天佑を保全し、万世一系の皇祚^{こうそ}を踐める大日本帝国皇帝は忠実勇武なる汝有衆に示す。朕ここに清国に対して戦いを宣す。朕が百僚有司は宜しく朕が意を体し陸上に海面に清国に対して交戦の事に従い、もって国家の目的を達するに努力すべし。いやしくも国際法に戻らざる限り各々機能に応じて一切の手段を尽くすにおいて必ず遺漏^{おも}なからむことを期せよ。惟^{おも}うに朕が即位以来ここに二十有余年文明の化を平和の治に求め、事を外国に構うるのきわめて不可なるを信じ、有司をして常に友邦の誼を篤くするに努力せしめ、幸いに列国の交際は年を逐うて親密を加う。何ぞ料らむ清国の朝鮮事件における我に対して著々隣交に戻り信義を失するの挙に出てむとは、朝鮮は帝国が其始めに啓誘して列国の伍伴に就かしめたる独立の一国たり。而して清国は毎に自ずから韓国をもつて属邦と称し、陰に陽にその内政に干渉し、その内乱あるにおいて口を属邦の拯難^{じょうなん}に籍き、兵を朝鮮に出したり。朕は明治十五年の条約に依り兵を出して変に備えしめ、さらに韓国をして禍乱を永遠に免れ治安を将来に保たしめ、もって東洋全局の平和を維持せむと欲し、先ず清国に告ぐるに協同事に従わんことをもつてしたるに清国は翻^ひって種々の辞柄^{ひせい}をもうけこれを拒みたり。帝国は是において朝鮮に勸むるにその秕政^{りかく}を釐革し、内は治安の基を堅くし、外は独立国の権義を全くせむことをもつてしたるに、朝鮮はすでにこれを肯諾したるも清国は終始陰に居て百方その目的を妨碍しあまつさえ辞を左右に托し、時機を緩にし、もってその水陸の兵備を整え、一旦成るを告ぐるや、直ちにその力をもつてその欲望を達せむとし、さらに大兵を韓土に派しわが艦を韓海に要撃しほとんど亡状を極めたり。すなわち清国の計画たる明らかに朝鮮国治安の責をして帰するところあらざらしめ帝国が率先してこれを

諸独立国の列に伍せしめたる朝鮮の地位はこれを表示するの条約と共にこれを蒙晦に付し、もって帝国の権利利益を損傷し、もって東洋の平和をして永く担保なからしむるに存するや疑うべからず。熟々そのなすところに就いて深くその謀計の存するところを^{はか}揣るに実に始めより平和を犠牲としてその非望を遂げむとするものと言わざるべからず。事すでにここに至る、朕平和と相終始してもって帝国の光栄を中外に宣揚するに専なりといえども、また公に戦を宣せざるを得ざるなり。汝有衆の忠実勇武に依頼し、速やかに平和を永遠に克復しもって帝国の光栄を全くせむことを期す。

清国皇帝の布告は興味深い文書であり、不正確な事実の陳述と、来るべき戦争における中国の戦争計画の主な特徴のいくつかを明らかにしている。

朝鮮はわが大清に^{はんぞく}藩属すること二百余年、歳修^{annual tributes}職貢をなすは中外ともに知るところなり。近十数年来、朝鮮は時に内乱多し。朝廷は^{どうじょう}為懐し、しばしば^{かんてい}派兵戡定し、朝鮮ソウルに派員して随時保護す。本年〔旧暦〕四月〔1894年5月〕、朝鮮はまた土匪の変乱あり。朝鮮王が^{ちんあつ}兵援剿情を請うことば迫切なり。すなわち李鴻章に論して、兵を發して援に赴かしむ。牙山に^{ハサン}着くやいなや匪徒は星散す。すなわち^{わじん}倭人〔くだけた、輕蔑的呼称〕ゆえなく派兵し、ソウルに突入し、増兵すること万余、朝鮮に迫り国政を更改せしめたので、種々おさめがたし。わが朝廷の撫綏藩服は、その国内政事を自理せしむ。日本と朝鮮が立約するは属〔国〕と〔独立〕国に係り、重兵欺圧をもって革政の道理なし。各国の公論はみな日本の出兵に名分なく、情理にあわずとなす。撤兵和平を協議したが、〔日本は〕悍然と顧みず、釈明するところなく、さらに陸続と兵を添え、朝鮮百姓と中国商民をますます驚かしむ。もって〔清国は〕兵を添え保護に行かしむ。中途に至り突然倭船多隻あり、わが不備に乗じて、牙山海面にてわが輸送船を砲撃し撃傷したる状況は、ことに予期せざるところなり。日本は条約を遵守せず、公法を守らず、任意に詭計を専らとするは公論に明かなり。特に天下に

布告す。朝廷がこの事を処理するは、すでに仁至り、義尽くす。而して倭^わ人は盟を越え敵対し道理なく、もはや容認しがたい。よって李鴻章に嚴命して各軍を派し迅速に敵を消滅せしむ。陸続と雄師を発し、韓民を塗炭から救う。沿江沿海の各將軍、總督、巡撫および統兵大臣は戦争に備え、倭^わ人船舶がもしわが港に入るならばすなわち痛撃しことごとく殲滅せよ。わが將軍はいささかも怠りなく命令にしたがい、嚴罰を避けよ。この通諭を知らしめよ。これを^{おそれうやまう}欽 せよ²。

陸上における第二の戦闘は、成歓での遭遇の50日後、9月15日に1万3000～1万5000人の中国軍と1万6000人の日本軍の間で、平壤で起こった。中国軍は8月4日に平壤に到着して、堅固な要塞で防御する大規模な準備を行なった。攻撃する側は9月15日に、いくつかの方向から集まり、特に北側と南東側は遮蔽物がなく、勇敢に攻撃した。防衛する側は強力だったが、後部からの日本軍の奇襲攻撃によって最終的には裏をかかれた。午後4時30分、中国軍は白旗を上げた。大雨と闇夜に乗じて午後8時に平壤を離れ、義州の鴨緑江河岸に向かった。中国軍は死者2000人、負傷者4000人と推計される。日本側は死者102人、負傷者433人、行方不明33人であった。全日本軍が16日早朝に平壤市に入った。

この決定的な戦いの日に、日本軍の大本営は東京から広島に移され、天皇みずから帝国軍隊の最高司令官となり、粗末な仮の宿で、帝国軍隊の司令官としての義務を果たした。この移転が日本軍人に与えた道徳的效果が驚異的に大きかったことは言うまでもない。平壤の戦いによって、韓国から中国軍が一掃された。2日後、鴨緑江口の近くで海軍の戦があり、これは黄海北東部の海岸に沿った海路を切り開いた。17日早朝、戦艦扶桑（排水量3709トン）、8隻の巡洋艦（4278～2439トン）、1隻の沿岸防衛砲艦、

² 『外交文書』所収の「清国宣戦上諭」を参照して訳した。原載は『清光緒中日交渉史料』第16巻。



THE CAPTURE OF PING-YANG IN KOREA BY THE JAPANESE ARMY, SEPTEMBER 15, 1894
Painting by R. Caton Woodville

画1 日本軍の朝鮮平壤の攻略1894年9月15日、R. Caton Woodville 描く

および商船巡洋艦西京丸^{さいきやう}から成る日本の支隊は、12隻の中国の戦艦から幾筋もの煙が地平線に相次いで現れているのを発見した。

それらの中国船はその前日に兵士と補給品を大通溝に上陸させたが、装甲艦^{ディンユエン チョンユエン}定遠と程遠（各7430トン）、戦艦^{ランユエン チンユエン}来遠と靖遠、沿岸防衛艇^{ピンユエン}平遠、巡洋艦6隻、水雷艇駆逐艦からなっていた。中国艦隊は総トン数と大砲の大きさでは勝っていたが、日本軍の船は比較的高速度であるという利点と、より多くの小型の速射砲を持っていた。砲撃は12時45分に中国側から6000米の地点で始められ、日本は3000米の地点から反撃し、日没まで続いた。中国の旗艦^{ディンユエン}定遠は戦闘の初期段階で旗竿を破壊され、その結果、艦隊は協調した行動ができなくなった。巡洋艦^{チャオヨン}超勇は火に包まれて沈没し、巡

³ 樺山〔資紀〕少将乗船。

ヤンウェイ チュエン
洋艦揚威と済遠、戦艦経遠は沈んだ。巡洋艦 広 甲は大連湾近くで座礁した。戦艦来遠も火に包まれたが、かろうじて旅順港に逃れた。二大戦艦のうち、定遠はひどい損傷を受けた。他の船舶はより少ない損傷で逃れたが、中国軍司令官は李鴻章に対して航海に堪えるのは1隻もないと報告した。日本艦隊は1隻も失われなかった。数隻は被害を受けたが、すぐに修理された。

陸上作戦にもどろう。平壤の戦闘以後、第一軍は陸軍中將野津^の [道貫] 子爵の広島第五師団、桂 [太郎] 陸軍中將 (現桂首相、子爵) の名古屋第三師団のもとに編制された。第五師団は第九、第十旅団からなり、それぞれ大島^{よしまさ} [義昌] 少将、立見^{たつみ} [尚文] 少将に率いられ、第三師団は第五、第六旅団から成り、それぞれ大迫^{おおさこ} [尚敏] 少将と大島^{ひさなお} [久直] 少将に率いられた。全軍の指揮は伯爵山県元帥がとった (のちに病のため野津子爵がとって代わり、第五師団の指揮は奥^{やすかた} [保鞏] 中將に代わった)。

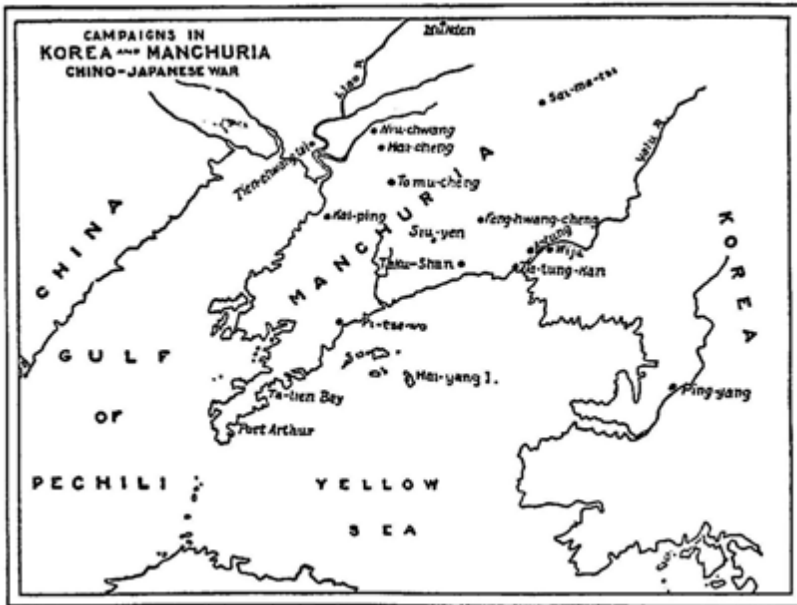
第一軍は韓半島の北国境を進撃した。中国軍は鴨緑江の南側では断固たる抵抗を行わなかった。というのは、ロシア軍が10年後にやったことと同じだが、防衛不能な義州を放棄し、鴨緑江の中国側の九連城を防衛しようとしたからだ。およそ10マイル左右には、安東から虎山まで堡壘と壕が作られ、その後ろに砦が築かれた。約2～3万の兵力を指揮する宋慶將軍は靉河との合流地点の虎山に有力な分遣隊を駐屯させた。しかしながら、10月24日の夜に日本軍は敵に発見されずに鴨緑江を越え、虎山の前に中隊を投入することに成功した。25日午後5時から猛攻撃が行われ、午後10時半には中国軍がそこを放棄した。日本軍はこの戦略地点を確保すると、九連城の主力軍はそれ以上の抵抗なしに夜間に撤退した。安東も容易に日本軍に占領されたが、鳳凰城は撤退軍によって放火され、放棄された。こうして日本軍は韓半島の国境を越え、死者4人、負傷者140人という比較的小ない損傷で中国領に入った。日本軍は中国人を支配するために安東に臨時の行政政府を立てた。小村 (現小村男爵、外相) が臨時の行政長官に任じられた。これはその後福島 [安正] 大佐が引き継いだ。

九連城の確保後、第一軍は二つに分かれた。一隊は桂中将指揮下、沿岸を進み、大孤山へ中国軍を追撃し、もう一隊は奉天に向かった。桂軍は大通溝と大孤山を攻略して11月5日に北方に転じ、17日に岫岩^{シュウイェン}で中国軍を破った。柞木城^{トオムチヨン}は12月12日に攻略され、翌日、海城^{ハイチヨン}が落ちた。しかし1万の中国軍が立てこもる鎮瓦寨^{カンワーサー}が陥落したのは18日のことであった。他方、第一軍の第二師団は賽馬集と他の地点から敵を一掃し、満洲の厳寒のなかで奉天に進撃した。

このときまでに東京第一師団からなる大山伯爵指揮下の第二軍は、男爵^{やまじ}山地〔元治〕中将の指揮のもとに、熊本第六師団の十二大隊とともに、大連港および旅順港をすでに占領していた。10月24日、旅順港の北東90マイルの貔子窩^{ピーズウォ}に上陸し、第一師団は11月6日に金州、翌日、大連湾を占領した。10月21日の真夜中に月が昇るやいなや、日本軍は旅順港を攻略した。それは素晴らしい位置にあり、強い砦と大砲によって武装され、難攻不落を誇っていた。数回の猛烈な砲撃以後、椅子山砦を含めてすべての重要な陸側の防衛線は昼までに日本軍によって除去された。海側砦の一部は、黄金山砦を含めて頑強に抵抗し、それらが陥落したのは午後5時のことであった。夜の間に中国軍はすべての砦を放棄し、大口徑57門と小口徑163門の大砲を残した。日本軍が市内に入ったとき、民家から闇討ちされた。多くの中国兵が便衣を着て民家に隠れて闇討ちしたのであった。日本軍は民家を無差別に搜索し、抵抗する多くの成人男子を殺した。中国人およそ4000人が殺された。日本軍の死者は29人、負傷者は233人であった。同時に港湾は中国戦艦からの抵抗はなかったので、日本軍は機雷を除去し、10月24日夜、旅順港に入港した。

中国軍は金州を回復すべく10月21日と22日に相次いで攻撃したものの、撃退されていた。蓋平で第一軍の桂中将の部隊に参加した第二軍の一部は、12月10日に蓋平河の滑りやすい氷を越えて街を占領した。

佐久間〔左馬太〕中将指揮下の仙台第二師団の残り^{ためとも}と熊本第六師団（遼東半島へ向かっていた第十二大隊は除く）は黒木〔為楨〕中将指揮下で抵



地図2 朝鮮、満洲における戦役（日清戦争）

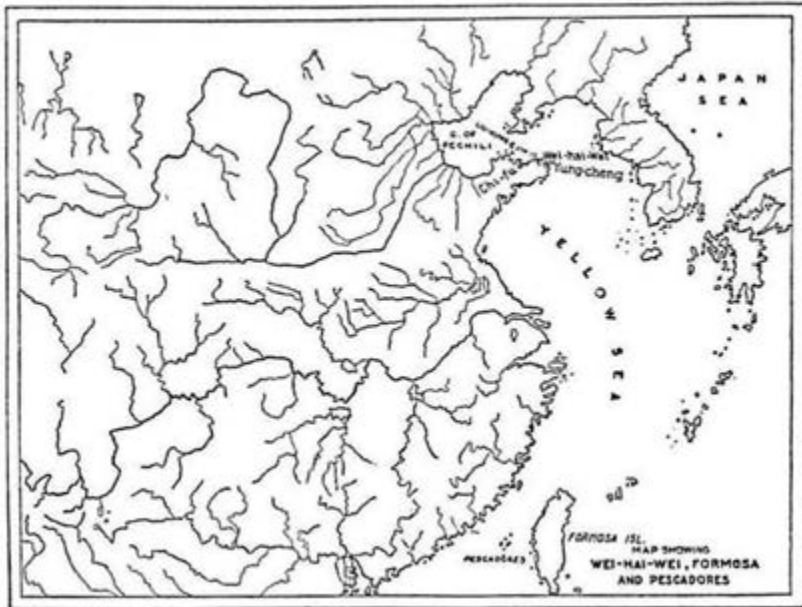
抗を受けることなしに、1895年1月20日から24日にかけて山東省の榮成に上陸した。この遠征の目的は中国北洋艦隊の集合する威海衛の海軍に協調して攻撃を加えることであった。26日に榮成を発ち、日本軍は二路に分かれて進撃し、2月初めに威海衛で合流することにした。二路の軍は途中で中国軍から精力的な攻撃を受けた。特に北路軍は守りの堅い劉公島対岸の摩天嶺で抵抗に遭遇したが、敵は2000米しか離れていない戦艦から68門で猛攻を浴びせた。大寺〔安純〕少将はこの戦闘で倒れた⁴。砦は9時間におよぶ一斉射撃のすえによりやく落ちた。中国軍は威海衛の街を放棄し、日本軍は2月2日にこれを占領した。これで陸軍の任務が終わった。というのは、中国海軍に対処するとともに、日島と劉公島の砦を攻撃する任務は、

⁴ 日清戦争における唯一の将官戦死者であった。

海軍に与えられていたからだ。

日本側の25兵士、16魚雷艇に対して、威海衛の中国艦隊は15隻の戦艦からなり、定遠、鎮遠が含まれていた。日本軍は海上で数的優勢を保持しただけでなく、艦隊と協調する陸軍を落としていたので、中国軍の敗北は既定路線であるように見えた。この環境下で日本艦隊を指揮する伊東〔祐亨〕提督は、個人的友人たる丁如昌提督に、旧友と敵意のなかで相まみえるのは遺憾だと走り書きした手紙を渡した。丁の呼びかける抵抗は犠牲を増やすだけだと指摘し、開明的な愛国心に訴えた。伊東はさらに丁に対し、戦争が終わるまで日本の名誉ある客人となり、戦後中国の復興のために祖国に戻るよう勧めた。

丁はこの手紙を読んで感動したが、従者に「私を殺せ」と言い、降伏よりは死を望んだ。さらにこう続けた。「提督の友情には感謝するが、国家への義務を放棄することはできない。私に残された道は死を選ぶことだ」。栄成湾を基地司令部とする日本海軍は、1895年1月30日に日島と劉公島を攻撃し、2月7日の総攻撃までしばしば中断した。このとき、日本水雷艇の夜襲が成功して、定遠号と他の3隻が沈没した。中国艦隊の13隻の魚雷艇は芝罘に逃れ、6隻の駆逐艦などが日本軍に捕らわれた。靖遠号は9日に沈没した。まもなく日島が陥落し、劉公島の東砦が静かになった。12日朝、広丙クワンピンの程〔璧光〕司令官が白旗を振りながら日本の旗艦松島に近づいて丁提督の手紙を渡した。それは港のすべての船と劉公島の正式な降伏が書かれていた。丁提督は中国内外の将兵と威海衛周辺の高陸の民間人が妨害されずに戦線から撤退すること、中国駐屯のイギリス艦隊司令官が中国側の降伏条件を忠実に履行することを保証するよう求めた。この手紙を受け取った伊東提督は、将官会議を開き、のちに裏付けられるように多くのアドバイスを受け入れたが、兵士は逃すのではなく、捕虜とした。しかしながら、提督は丁の個性と国家への忠誠心を高く評価していたので、丁の困難な立場を理解してその要求を認めるよう主張した。伊東は丁に対して、みずからの安全と中国の未来のために、日本の客となるよう勧め、すべて



地図3 威海衛、台湾、澎湖諸島

の兵士を釈放することに同意したが、イギリス司令官による保証の提案については受け入れを拒否した。伊東は武将としての丁の名誉を信賴していた。伊東は丁と定遠号の司令官劉〔歩蟾^{ほせん}〕に贈り物を贈った。次の朝、程はマストに中国旗の半旗を掲げて再度松島を訪ね、丁からの返事を伝えた。程は悲しそうに、丁は伊東の贈り物を受け取れない、劉司令官と劉公島の張〔文宣〕司令官とともに、自決したと伝えた。降伏についてのすべての取り決めは故総督の最大の名誉のために行われ、その遺体は捕獲された中国巡洋艦の1隻で岸に上げられた。釈放された陸海軍の兵士たちは、5124人であった。日本旗が戦艦鎮遠、巡洋艦平遠、濟遠、広平と6隻の砲艦に掲げられた。威海衛の感動的な陥落をもって、日本海軍は北洋艦隊を完全に麻痺させ、渤海湾を完全に支配した。伊東提督は3月3日、広島に帰還した。

韓国から中国人を追放し、旅順港と威海衛を占領し、日本は想定していた主な作戦を終えた。戦争物語の残りを手短かに話そう。海城は12月13日〔第一軍団〕第三師団が占領し、中国軍は1～2月にかけて3回、この重要な城の奪回を試みて失敗した。〔第二軍団〕第一師団は2月10日に金州から営口、すなわち条約港、牛莊へ向けて進撃した。第一師団は二隊に分かれて、牛莊を北へ、そして西へ攻撃した。そこで営口の第一師団と合流しようとした。牛莊は3月4日、血腥い市街戦のすえに陥落し、1880人以上の中国兵が戦死した。2日後、第一師団は第一軍団の協力なしに営口を占領したが、敵の抵抗はなかった。両軍は遼河対岸の田庄台の連続砲撃に参加したが、それは中国兵が戻るのを妨げるための破壊であった。

3月末に日本の一縦隊が台湾近くの澎湖列島で捕らわれた。中国政府は2回和平使節を派遣していたが、今回は李鴻章総督を和平のために日本に派遣した。彼は3月19日に下関に到着し、日本側の和平代表である首相、伊藤伯爵（のち侯爵）、外相、陸奥子爵（のち伯爵）と会った。李鴻章には養子^{リチンファン}李経方^{リチンファン}が全権代表として付き添った。李鴻章は和平を提案したが、日本の要求条件は極めて受け入れ難いものであった。24日、交渉から宿舎に戻ったときに狂信的な小山〔六之助〕は、李鴻章を極東の平和の攪乱者と信じて拳銃で撃ち、左の頬を負傷させた。これは全国民にとって極めて遺憾な事件であった。天皇は無条件に3週間の休戦条約を認めた。李鴻章はまもなく負傷から回復し、4月10日に交渉を再開した。日本の和平条件は4月1日に示されていたが、さまざまな修正を経て下関条約の基礎となり、4月17日に調印、5月8日に批准された。この条約により、韓国の完全な独立がついに保証された。中国は日本に遼東半島、台湾、澎湖列島を割譲すること、賠償として2億テールを支払うことに同意した。そして杭州、蘇州、沙市、重慶が外国貿易のために開かれ、外国人が中国において製造業に従事することを認められた。日本はこの戦争に7カ月従事した。軍費に2億円を費やし、死者1005人、負傷者4922人（ほかに病死者1万6866人）の犠牲を出したが、二軍団と五縦隊、12万人を派遣した戦争は、輝かしい

成功裏に終わった。

戦争が日本と中国に与えた結果について、二、三を付け加えよう。中国は概して偽装された祝福を受けた。というのは、政策と行政制度の欠陥が暴露され、愛国者に対して改革の必要を確信させたからである。戦争の結果、両国に互いへの敵意が生まれなかったのはこのためである。逆に、思慮深い中国人は、自国政府の失敗を考えるほど、日本に惹きつけられた。中国のような広大で保守的な国の改革は緩やかだが、1894～95年の戦争の結果、種は蒔かれたといってよい。日本の芸術や科学についてほとんど知らない外国人でさえも、戦争中に日本が示した組織力、勇気、忍耐性、先見の明を認め、成長へのさらなる希望を認めざるをえなかった。

人はこの勝利の実際の側面を知れば知るほど、日本の成功の巨大さを実感した。世界によるこのような評価は、日本人をして将来へのますます大きな野心を刺激した。しかしながら、戦後の刺激は、勝利からだけでなく、後に続いた苦い経験から得られたものでもある。すなわちヨーロッパの三カ国による日本への力ずくの干渉であり、それは東洋問題の全局面を直ちに変えた。

第5章 韓国と満洲における日本およびロシア

日本全権と中国全権との間で、下関において平和交渉が行われていたときに、ロシアとフランスは介入を準備しており、ドイツは外交的考慮からロシアを助ける申し入れを行い、列強による共同調停という不毛の提案をしたイギリスは、日本の要求に反対ではないと述べた。介入計画の機が熟したので、1895年4月23日、ロシア、フランス、ドイツの代表は東京の外務省を訪問し、本国政府からの覚え書を提出した。そこには日本が南満洲の遼東半島を中国に返還するよう勧告していた。彼らによれば、日本による領有は中国資本の位置を危うくするだけでなく、韓国の独立を危うくするものであり、極東全体の平和に危険を与えるからであった。覚書は丁寧なことばで書かれてはいたが、三カ国の極東艦隊がもし必要ならば一致して武力に訴えて、要求実現のために干渉する決意を宣言したものである。この重大な危機にあたり、日本当局は8カ月の消耗的戦争のあとで、ヨーロッパの三列強と一国で戦うことは不可能であると判断し、各国に同意した。1895年5月10日、日本国民は平和への変わらぬ決意を繰り返した天皇の勅令を拳拳服膺^{けんけんふくよう}し、天皇の度量の広さを付度して、三カ国が勧めたように遼東半島を中国に返還した。この記憶すべき事件によって、あらゆる階層の人々が刺激された感情は激しいものであった。日本からすれば犠牲の大きい戦争の正当な果実を列強の行為によって奪われたことは誰にとっても明らかであった。列強の行為は中華帝国の統合を真に尊重するものではありえなかった。韓国の独立と中国の進歩を日本ほど望んだものはなかった。他方、介入側の中心にいるロシアは旅順港と満洲全土を奪う計画であった。この巨大な領地がロシアの手に落ちることは、韓国の独立を脅かし、ひいては日本の安全にも及ぶものであった。日本人は当然ながら、東洋の平和を確保するには、日本みずからが強く豊かになり、1895年の屈辱を繰り返すまいという信念に目覚めた。この信念ははっきり記録されているように、復讐するというよりは、進歩と文明の方法により、極東全体と日本

の死活の利益を守ろうとするものであった。それゆえ、1895年以来、日本は過去に例を見ないほどの短い期間に日本の物質的な力をあらゆる分野で急速に発展させようとした。

しかしながら、中国における1895年の介入以後、賢明なロシア外交は新時代に入った。最初の明確に理解できる両国間の関係は、1895年7月にパリで提起され、ロシアによって保証された4億フラン（8000億ドル）の中国借款であった。その半分は日本向けの賠償金として支払われるものであった。それから、パリとサンクトペテルブルグの資本家たちのシンジケートが露清銀行を創設、本部はサンクトペテルブルグにおくものとされた。ここではロシア皇帝の親しい友人のウフトムスキー公爵Prince Ukhtomskyが総裁となった。1896年9月8日にこの銀行とサンクトペテルブルグの中国公使との間に重要な協定が結ばれたが、これは後に他の多くの顕著な文書の基礎となることが明らかになった。この協定やこれに基づくロシアの立場により、露清銀行は東清鉄道の建設を企画することになった。それは満洲の黒龍江省と吉林省を通るシベリア大鉄道の支線であり、南ウスリー支線と結ばれた。ロシアと中国の国民だけがその株主になれた。80年後に中国政府は無償で、あるいは36年後に有償で鉄道を引き渡される。新鉄道で運ばれる中国とロシアの輸出入品への関税率は、中国の通常関税の3分の2でよいとする協定も結ばれた。鉄道の東端で最初の鉄入れが行われるやいなや、事件が起こり、その結果、シベリア鉄道はきわめて戦略的な遼東半島まで伸びた。これは最近、日本がロシアの勧めで中国と韓国の独立のために返還したところであった。1898年3月、山東省で2人のドイツ人カトリック宣教師が群衆により殺害されたときにドイツ皇帝の政府が済南府、膠州湾とその後背地をどのようにして99年租借とさせたかは中国史に属する。

これはヨーロッパのライバル列強による領土分割の出現の象徴である。それは弱き中華帝国の土地における影響あるいは利益の「範囲」を切り取る最初の機会をつかむことに、ドイツが熱意を示したことにほかならない。



地図4 中国と満洲における外国の影響力の及ぶ地域

ドイツの行為は極東の勢力バランスを崩し、すべての競合する勢力の攻撃心が満たされるまでやまなかった。イギリスは2月に揚子江一帯のいかなる部分も、いかなる国に譲渡されない旨の言質を得た。これに次いでロシアは旅順港と大連湾の25年租借を更新した。露清協定は3月27日に調印され、租借は中国の主権に対する偏見を構成するものではないとここに宣言されたが、明らかに華北水域でのロシア海軍の保護を意図したものであった。ロシアはシベリアに巨大な領土をもつが、このときまで沿岸に、冬の間に氷に閉じ込められない、十分な海軍基地をもたなかったことは記憶さるべきである。いまやついにロシアは不凍の旅順港と大連湾を確保し、前者と後者の一部は海軍だけのために用いられることになった。大連湾の残りの部分は各国の商船にも開かれた。協定にはロシアが満洲鉄道から大連湾まで、そしてのちにロシアが要求したように旅順港まで、さらに必要に

応じて牛莊から韓半島国境の鴨緑江まで支線を建設することも加えられた。3月27日の補足として、5月7日に上述のことが特別協定として結ばれた。ロシアによる遼東半島の突端の租借は、7月1日にイギリスが渤海を挟んで反対側の山東省の岬、威海衛湾を類似の条件で獲得するうえで利用された。この港は中国の賠償支払い遅延のゆえに、日本軍が占領するという火種をかかえたままであったが、今や日本との関係が特に友好的になった列強の力によって、状況は変化した。フランスによる西江開放の提案と雲南省の割譲、イギリスによる広州湾の割譲により、仏英のライバル関係は、新たなものになった。日本もまた新たな領土、台湾の対岸に位置する福建省の非割譲権を確保した。

状況をより明瞭に理解するには、ロシアによる遼東半島の割譲と、華北・華南の他の「外国影響下にある」「領域」との性質の違いをはっきりと識別する必要がある。すなわち、ロシアの例だけが、新しい海軍港と巨大な割譲地における軍基地（これは数世紀による拡張の結果を示す）とを鉄道によって直接結ぶ点である。遼東半島の戦略地点における海軍拠点の創出は、3年前にロシア自身が認めたように、北京に脅威を与え、韓国の独立を偽りにし、極東の平和を継続的に脅かすに十分なのだ。その危険とは、遼東半島の背後に控えるすべてのロシア資源が鉄道によって海と結ばれることによって、巨大な軍事的圧力となることである。

状況は1899年4月28日の英露鉄道協定によってさらに悪化した。この文書が生まれた背景は中国史に属する。ここでは、イギリスが万里の長城の北方には鉄道の割譲を求めなかった自制心とロシアが揚子江流域へは進出しない自制心を指摘すれば十分であろう。この英露協定の特殊性は署名者の一方が通常のように中国政府ではなく、二つのヨーロッパ国家が、中国の鉄道割譲において「他国の領域に入らない」ことを約束した点である。両国は長城以南でやってきたように外交上の緊急時には、政治的配慮によって鉄道領域の範囲を解釈するのだらう。米国が特別に推進したのは、帝国の領土的統一の原則と、すべての国の企業に平等な機会を与える——すな

わち「開放と機会均等」の原則を可能な、かつ望ましいものとするものである。1899年末から1900年にかけて、ヘイ長官 Secretary Hay は、中国のそれぞれの領域で「開放」政策を誓った者を守ると宣言した立場が成功するかどうか見守るため、列強を招いた。しかしながら、彼は異常に深刻な、排外主義的な報告が中国から届いたときに、列強の対応方針を策定することはほとんどできなかった。いわゆる義和団の蜂起の物語は、外交使節団が暴徒の襲撃を受けて包囲され、そこから脱出する活劇の逸話とともに、中国近代史のなかで語られるだろう。ここでは二つの特徴を見ておけば十分である。すなわち事件の鎮圧における日本の役割と満洲問題との関係である。

1900年6月中旬までに12カ国の代表は、多くの自国キリスト教徒と同様に北京に孤立させられ、義和団と帝国軍隊に対する頻繁な攻撃から自衛を余儀なくされた。シーモア海軍大将 Admiral Seymour と1200人の海兵隊は包囲された外国人の救出に武力をつかうことがもはや不可能なことを理解した。この段階でイギリス政府は、日本以外のどの列強も部隊を急派して大使館員を救出することができないことを覚った。しかし、日本は列強と協調し、団結した明示的な要求のもとでのみ行動することを決定していた。それゆえ、日本は太姑に3000人の兵士を輸送しつつ、同盟国軍と協調して行動することを断固として主張していた。日本が直ちに2.5万人から3万人の兵力を沿岸から派遣する勧告に関するソールズベリー卿 Lord Salisbury と欧州各政府との交渉は、7月初めに同盟国の協調した行動ではないという理由でドイツの反対を引き起こした。ロシアは中国の秩序回復を1カ国に委ねるのは賢明ではないと答えた。手間隙かけた挙句、曖昧な答えを得ただけだったことに焦燥感を募らせたイギリス政府は、日本から適切な兵力を動員する費用をみずからの責任で保障することにした。これは7月6日のことであり、その日に日本はついに独自に2万2千人の兵員派遣を決めた。このときまでに日本の杉山一等書記官とドイツ公使フォン・ケトレル German Minister von Ketteler は北京で殺害され、太古の砦

は同盟国にとられ、英独の兵士はまもなく1万人に達しようとしていた。7月14日、日本からの援軍が到着する3日前に天津は陥落した。3週間後、天津ではなにも行われず、1万5780人の同盟軍、うち8000名は日本軍であったが、8月4日に北京に向けて進撃した。その道中、血気にはやる義和団と中国軍に遭遇したので、8月14日に北京に到着するまでに同盟軍はおよそ800名を失った。日本軍は夜9時50分まで15時間続いた恐るべき戦いのあと、東城壁の門を二つ破壊し、紫禁城に突入した。他方、前に派遣されていた縦隊が同盟軍の残りを導き、ロシア人が午後5時に破壊していた門を通して英公使館に向かった。英公使館内で言い尽くせないほどの困難のなかで自衛しているうちに、同盟軍の勝利の入場があり、外国人が喜び熱狂したことは、想像にあまりある。包囲はようやく解かれた。宮廷は西安⁵に逃れ、中国の首都は外国の手に落ちた。

この記憶に値する出来事のなかで、日本兵士がその突進と紀律において広範な称賛を得たことを読者に喚起する必要はあるまい⁶。日本の兵站組織と輸送方法も、味方から同様に称賛された。公正な観察者は当番兵や非戦闘員の適正な扱いにおいても、非キリスト教徒の日本兵士が、当時華北を代表した非キリスト教国〔日本を指す〕の陰に隠されたことを幾度も気づいている。彼らは征服勢力の臨時政府下にある北京の人々を扱う組織力と

⁵ 原文Si-nganは誤植であろう。

⁶ 旧会津藩武士柴五郎（1860～1945）の活躍は特に著名である。柴は義和団の乱の防衛戦で賞賛を浴び、欧米各国から数々の勲章を授与された。『タイムズ』の記者ジョージ・アーネスト・モリソンの報道も相俟ってリュウトナンカーネル・シバ（柴中佐の意）は欧米で広く知られる最初の日本人となった。陸軍内きつての中国通としても知られ、事あるごとに中国へ派遣された。義和団の乱において総指揮を取ったイギリス公使クロード・マクドナルドは、共に戦った柴と配下の日本兵の勇敢さと礼儀正しさに大いに心を動かされ、深く信頼するようになり、1901年の夏の賜暇休暇中に英首相ソールズベリー侯爵と何度も会見し、7月15日には日本公使館に林董を訪ねて日英同盟の構想を述べ、以後の交渉全てに立ち会い、日英同盟締結の強力な推進者となった。このことから柴は日英同盟のきっかけをつくった影の立役者として評価されている。

統制力においても優れていた。これらの長所はすべて外から見えるものであるが、胸に深く秘めた、燃えるような祖国愛が勇気と忍耐を与えていた日本兵士自身は、血気を抑えたのであった。5年前、列強のうちの三カ国によって日本は侮辱された〔1895年の三国干渉〕のであるが、〔日本〕兵士はその列強の軍隊と肩を並べて行進したのである。これは息子たちの血の代価にふさわしいことであった。いまや彼は意味のない位置に退かされたのではなく、それどころか、以前の軍事的効率は前進し、近代化された戦術と道徳心においても対抗した。日本の経験は心身の訓練において貴重であり、結局は文明開化に完全に参加するうえでなんら障害にはならないことを示していた。華北戦役を通じて東洋における日本の地位は向上したが、1894～95年の戦争以後、列強からの評価もかなり高まった。さもないと1902年の日英同盟は結ばれることがなかったであろう。日本がかくも落ち着いた自信に裏付けられて国家的活動を進めることもできなかったであろう。

隣の中華帝国の弟子であった日本がいかに国家の発展を速めたかは、北京奪取の前後に両国皇帝が交わした電報に顕著に示されている。いつか日本が瀕死の中国を蘇生させ、東洋から白人の影響力を除去する汎黄色人連盟をつくるという、しばしば繰り返された理論を論駁するのではなく、中国の書簡と日本の返書を比較すると、それぞれの国家の姿勢が忠実に表現されている。7月3日、大沽要塞が陥落してから半月後、中国皇帝は日本天皇に個人的な親書を送り、現在の東西対立のなかで、東洋を支えるのは中国と日本のみだと強調している。西洋が虎視眈々と狙うのは中国だけであろうか。皇帝はいう。もし中国が陥落するならば、貴国もまた一人で立つことはできまい、と。この議論で、天子は小異を捨てて東洋を救済するよう仲間の君主に誠実に訴えた。この注目すべき呼びかけに日本天皇が応えて、中国が直ちに国内の混乱を鎮圧し、不可侵の外国使節団を救い、中国自身の努力によって秩序を回復するならば、日本は列強との交渉で偉大な帝国の利益を擁護するであろう、と答えた。初めの書簡を起草した者は

日本を東洋の裏切り者と考えたかもしれないが、日本の君主の返書は、人類の最も優先されるべき変更不能な政策であった。この政策は文明の一つの形、あるいは地表の一区画を防衛する立場から離れられないものであった。およそ3カ月後の9月24日に、中国皇帝は「逃亡先の」太原から日本兵士の働きに感謝する手紙を送り、列強に平和への結論を急ぐよう働きかけてほしいと懇請した。これに応じて日本の支配者は、宮廷が北京に戻り、人心を鎮め、最近の暴行について列強に対して心から遺憾の意を表明するかどうか、また反動的な閣僚を更迭し、能力をひろく認められた者によって新政府が組織されるかどうかには平和がかかっていると示唆した。

いくつかの会議のあと、11月9日に北京の和平全権委員は平和条件についての最終結論に達した。それは2カ月後に同じ内容の覚書として提出された。交渉に長期間を要したのは、列強の間で争点の調整に時間を要したことによる。われわれは議論の細部に立ち入るとまはない。それらは中国史に属する事柄だからである。平和解決に対する日本の貢献を正確に指摘することも不要だ。その貢献は主として調整的役割であった。4.5億テール（3億3390万ドル）の賠償金のうち、日本は7.73%を得た。平和が訪れる前、厦門で事件が起こった。それは一角での誤解を生じさせた。8月24日、暴徒が市内で日本の仏教寺院を焼き払い、これに対して日本陸戦隊が領事館と日本居留民を守るために上陸した。さらに多数の海軍がその後上陸し、台湾経由でさらに増強中と報じられた。日本は厦門占領を狙っているとする流言が流れ、市民のあいだで動揺が広がったので、道台⁷は多くの知識人や商人とともに私的立場から、日本領事に対して焼かれた建物や兵士の費用を弁済するので撤兵してほしいと要請した。この間にイギリスとドイツの軍艦が到着し、厦門に向かっていた日本軍艦は台湾に戻った。日本軍の駐屯を不必要なまでに恐れていた人々は、いまや厦門の日本居留民を軽侮し始めた。外国海軍の到着によって日本居留民の地位は突然急落

⁷ 道は清初にいたるまで省や府州のような正式の地方行政官庁ではなかったが、1753年（乾隆18）に中級地方官庁として独立し、その長官を道台と称した。

したが、秩序の回復に伴い、すべての撤兵が行われると、同市の日本人の地位は、事件前と同じになった。福建省や台湾の日本居留民の一部がある程度の排外主義で動かされたのは覆すことのできない事実が、東京政府の意図が完全に平和的であったとは言い切れない。

おそらく義和団事件の最中およびその後、中国の領土保全と門戸開放がより頻繁かつより明白に列強によって語られるようになった。明瞭な宣言はロシアからもきた。しかしながら、その行為は、ロシアがいつも否定するのとは異なって、少なくとも別の原則によるものであった。ロシアは当初、華北の事件は自壊するか、あるいは中国自身の手で鎮圧できるとみていた。ロシア外相ムラビエフ伯爵 Count Muraviev は2週間で鎮圧できると予言していた。しかしながら、蜂起の性質は中国政府の協力なしに1カ国で鎮圧できるものではないことが明らかになった。そこで、ロシアは北京へ進軍する列強に加わったが、ロシアの新聞社やその記者たちは同盟への参加を付録程度に考えていた。彼らによれば、事件は中国における列強の攻撃的行為から始まったものであり、ロシアはこれに関与していないからであった。しかしながら、続いて起こった事件は、ロシアが華北の状態に相対的に少ししか関与していなかったとしても、満洲情勢を機敏に力強くつかんでいることを示した。現在の知識をもって満洲におけるロシアの攻撃的姿勢を、領域におけるロシアの利害が危殆に瀕したためと判断することはできない。しかし、事件のほとんどは、6月26日からロシアが突然6200万ルーブルにもなる、満洲における巨大な好戦的活動に着手したことによるとと思われる⁸。数日のうちにシベリアの隣接地区では戦争状態が宣言され、ヨーロッパロシアだけでなくウラジオストク、ハバロフスク、ブラゴベシチェンスク、トランスバイカルから軍隊が満洲に進撃した。広範な戦線の各地点で主導権が中国側、ロシア側のどちらにあるのかを調べるのは無用であり、不可能だ。満洲の一部の戦略地点が義和団とその同調者

⁸ 原注1ルーブルは51.5セントに相当する。

に荒らされたことは明らかであった。彼らはいつからかは不明だが、鉄道建設を妨害し、損害を与え、教会を攻撃し、南方の改宗者を迫害した。そして、7月16日にアムールを越えてロシアの都市ブラゴベシチェンスクを砲撃し、そのため、河川交通は停止し、1週間後、韓国国境近くの安東〔丹東〕で80人のロシア人が殺害された。ロシアの侵略が中国人の不満を刺激して、他の暴行も続いた。ロシア皇帝の軍隊は自由港の牛莊を占領し、8月5日、そこに臨時政府を組織した。同盟軍が北京に入る前に、ロシアは牛莊を占領したあと、琿春、愛琿、ハルピン、三姓や満洲に散在する他の都市を占領した。この間の7月には中国政府は満洲鉄道の中国人経営者を解任し、以後、中国は名目的にのみ所有するが、実際にはロシアの所有に帰属した。

かくて同盟軍が華北の秩序を回復したとき、ロシアはまだ全満洲を征服しておらず、8月25日に北京の使節団を救出した10日後にロシア皇帝は「ロシアは北京から公使と軍隊を撤退させる」と宣言して列強を驚かせた。観察者が思い、一部のロシア人記者も認めたように、ロシアの突然の行為は、隣人が混乱や無秩序に陥っているときに恩恵を与える伝統的政策によるものでは決してなかった。細部が実行不可能と考えられたにもかかわらず、その提案の原則は受け入れられた。満洲についてみると、8月25日の通告は、平和が回復され、鉄道を守る措置がとられ、他の国が妨碍をしないようになったのち、撤兵が行われるというものであった。しかしながら、満洲の武装平和が突然に止むことはありえなかった。それどころか、寧古塔〔寧安〕、チチハル、奉天、錦州、安東を含めて多くの戦略地点の占領はまだ行われず、12月初めに東三省全体がロシアの手に落ちたのであった。

イギリスがドイツを誘い、1900年10月16日に悲願の英独協定を調印したのは、満洲情勢に対する重大な懸念に基づくことは疑いない。それは容易に調和させえない3つの原則を追求したものである。中国の残りの領土の保全、開港都市におけるすべての諸国にとっての門戸開放、機会均等、そして調印国が中国においてすでに獲得した権益の保護である。第1と第3

の原則が協定で支持されたことにより、結合の力はさらに弱められた。そこで両国は現在の紛糾を利用して領土獲得に動くことはしないと宣言していたが、他の強国がこの取り決めを守らない場合にはみずからの利益を守るために調印国と協議してよいとされていた。協定の原則を受け入れよとの誘いに対し、ロシアはフランスとともに、繰り返し主張してきた古い原則以上のものはないと賢明に答えた。他方、米国は初めの2つの原則への同意を表明したが、第3の原則は自国には関係ないと考えた。日本は調印国として協定に参加した。イギリスが作成した真の目的に照らして評価すると、協定は失敗したといえよう。なぜなら、もし満洲が中国領土の一部でないならば、第1の原則はどの国の領土保全を尊重するのかが不明だからだ。ドイツ帝国宰相のフォン・ビューロー伯爵 Count von Bülowは1901年3月15日にライヒシュタークで、さらに1903年末にも、英独協定は満洲とは関係ないと述べた。「私は満洲には関心がなく、何も考えていない」と語ったと報道された。「揚子江」協定という名はドイツが提唱したが、満洲ではなくドイツにとって目障りな揚子江流域のイギリスという特定の軍隊に適用されると受け止められた。協定の目的自体について調印国の解釈が異なるので、ランスダウン侯爵 Marquis of Lansdowneが1901年8月6日に「中華帝国の一部たる満洲には疑いなく適用される」と述べたのも無駄であった。ロシアが東三省を保有したままで協定にいかなる意味があるのかは疑問であった。

1900年末に『ロンドンタイムズ』紙面で北京特派員ジョージ・モリソン博士 Dr. George F. Morrisonにより、奉天タタール総督、増祺とアレクセーエフ総督 Admiral Alexiev とのあいだで11月に結ばれたとされる秘密条約の一部が報じられた。これは増祺総督が奉天に駐在するロシア居留民による満州を平和にする行政の詳細を報告したものであった。この協定はロシア皇帝も清朝天子も批准しなかったが、より重大な展開への序曲となった。1901年初め、北京の和平全権委員が義和団の暴行に関与した中国の地方官僚への懲罰を求めたとき、ロシアは列強と一線を画して中国側に立った。

ロシアのこの際立った行為は、サンクトペテルブルグでロシア皇帝政府と中国の公使が秘密協定の交渉を行っているとするうわさを伴った。この予想された協定にはいくつかの版が伝えられ、満洲だけでなく、イリ、新疆、モンゴル、甘肅省、陝西省、山西省もなんらかの意味でロシア領域に含まれていた。最初からそうだったのか、あるいはロシア側が譲歩したのかはわからないが、秘密条約は明確に次の8カ条からなっていた。それは満洲に対して少なくともロシアが元来持っていた意図を示すものであり、列挙に値する。すなわち、①ロシアは秩序回復の定まらない満洲への軍事的占領を続け、戦争賠償の問題を解決すべきである。②満洲にどれほどの中国兵力を駐屯させるかについて中国はロシアと協議すべきである。③相互の友好に偏見をもつとみられる満洲の將軍や官僚をロシアの要求に基づいて中国はいつでも解任すべきである。④中国の警察官数はロシアと協議するものとし、武器の使用は禁じる。⑤すでに定められた中立地域には特別な行政制度を組織すべきである。⑥満洲における鉄道や鉱山の割譲は、ロシアと協議なしにいかなる国の市民にも認められない。⑦鉄道賠償については鉄道会社との協定を通して鉄道の利益から全体あるいは一部を支払う。⑧ロシアは満洲鉄道から長城まで支線を建設することを許される。これらの要求の結果は真実であり、中国が認めた場合には、満洲がロシアの完全な保護国になることを意味した。満洲における軍事占領は平和の回復とともに終わるとされていたものの、このような留保は領域のロシア支配を永続させるものであった。日本は当初、情勢の重大性を見て、米英に打診した。イギリスは他の列強と協議した。列強はこうしてすべての同盟国との共通の協定に到達する前に1カ国と結ぶのは賢明ではないと中国に警告した。しかしながら、この抗議はロシアに対して重大な影響を与えず、協定は新聞で報道されたものとは違って、単に満洲撤兵の臨時段階にすぎないと弁明された。3月末までに日本とイギリスはロシアと直接対話をしたが、ロシアはイギリスに対して、独立国と結んだ協定を第3国に示すことは皇帝の政府の慣習にはないと拒否した。北京駐在の列強の大使に示すべきだ

という日本の要求に対してロシアは、条約が誰をも傷つけるものではなく、締結後に公表されようと語った。その回答は3月26日付であった。4月5日、日本はロシアに第2のメッセージを届けた。ロシアは突然要求を引き下げ、同時に満洲撤兵への第1の動きを有効にする方法として軍事占領を維持することを余儀なくされたと宣言した。

6月にもう1つの秘密の満洲条約が進行中だと噂されたが、それがたとえ真実だったにせよ、不成功に終わった。張之洞総督〔山西巡撫、兩広総督、湖広総督〕と劉坤一前総督〔江西巡撫、兩広総督〕の愛国的努力ほど、和平全権委員に満洲全体の外国貿易を開放する雰囲気を作ることに成功したものはない。8月末、北京駐在ロシア大使にポール・レッサー Paul Lessar が任命された。中国と連合国との和平交渉は1901年9月7日に調印され、宮廷は北京に戻ることが期待され、中国政府は外国軍隊の撤退をしきりに望み始めた。この機会をとらえて、ロシアは新満洲協定を提起したが、これは相対的に温和な条件のものであり、当時の中国全権委員たち、たとえば親露の李鴻章に受け入れやすいように見えた。この協定の基調は伝えられる限りでは、満洲からの撤兵は2～3年で完了し、4月に撤回された協定では、中国の武装は禁じられたが、奉天の中国軍はロシア将校が訓練し、その数はロシア側と協議しつつ決定する。中国人全権委員の弱い立場から考えると、ロシアの要求を受容したことに日本とイギリスが有効に抗議することは極度に困難であった。劉坤一と張之洞は皇帝と皇后に父祖の地、満洲を限りない野心をもつ外国に委ねることになるかもしれない、直接的脅威を説いた。宮廷の意思に呼応して、李鴻章は死に際にレッサーと会い、提起された条件を緩和するよう中国に対するロシアの友情を求めた。李鴻章は中国の重大問題を極度に曖昧なものにしたまま、11月7日に死去した。慶親王は反対の提案をしたが、それは満洲から1年以内に撤兵することを求めるものであった。この覚書に対するロシアの回答は1902年1月末に北京に届いた。それは全満洲の未知の鉱物資源をロシアだけに割譲する内容を含んでいた。これに対して米国、イギリス、日本は再度抗議

した。ヘイ長官は2月3日の覚書で露中両政府が繰り返し保証した中国全土の門戸開放の条件に注意を向けてこう述べた。「鉱山開発について、中国がいかなる会社に対してであれ、排他的権利あるいは特権を与えた条約を、米国政府は重大な関心をもって見守るであろう。それは中国と列強とのあいだで結ばれた条約の著しい無視である。それは独占を形成し、米国民の権利に深刻な影響を与えるからだ」と。ロシアはいつものようにこれに答えて、前に述べた門戸開放の原則を強く述べた。ワシントンの政府は、ヘイ長官がしがちなように、ロシアの統合を疑うことなしに議論することはできない。しかしながら、このときまでに外交界では重大事件が起こり、それはロシアの東方政策に対する実質的な抗議とみなされた。すなわち、日英同盟が1902年1月30日にロンドンで調印されたのであった。

この協定の公正・公開の原則はその条文によく示されている。以下のごとくである。

日本国政府および大ブリテン国政府は偏に極東において現状および全局の平和を維持することを希望し、かつ清帝国および韓帝国の独立と領土保全とを維持すること、および該二カ国において各国の商工業をして均等の機会を得せしむることに関し、特に利益関係を有するを以て左の如く約定せり。

第一条 両締約国は相互に清国および韓国の独立を承認したるをもって、および該二カ国いずれにおいても全然侵略的趨向に制せらるることなきを声明す。しかれども両締約国の特別な利益にかんがみ、すなわちその利益たる大ブリテン国にとりては主として清国に関し、また日本国にとりてはその清国において有する利益に加うるに韓国において政治上ならびに商業上および工業上、格段に利益を有するをもって両締約国は若し右等利益にして別国の侵略的行動により、もしくは清国または韓国において両締約国いずれかその臣民の生命および財産を保護するため干渉を要すべき騷擾の発生に因りて侵迫せられたる場合には両締約国いずれも該利益を擁護す

るため必要欠くべからざる措置をとりうべきことを承認す。

第二条 もし日本国または大ブリティン国の一方が、上記各自の利益を防護するうえにおいて別国と戦端を開くに至りたる時は、他の一方の締約国は厳正中立を守り、あわせてその同盟国に対して、他国が交戦に加わるを妨ぐることに努むべし。

第三条 上記の場合において、もし他の一国または数国が該同盟国に対して交戦に加わる時は、他の締約国は来りて援助を与え、協同戦闘に当るべし。講和もまた該同盟国と相互合意のうえにおいて之を為すべし。

第四条 両締約国はいずれも他の一方と協議を経ずして、他国と上記の利益を害すべき別約を為さざるべきことを約定す。

第五条 日本国もしくは大ブリティン国において、上記の利益が危殆にせまれりと認むる時は、両国政府は相互に充分にかつ隔意なく通告すべし。

第六条 本協約は調印の日より直ちに実施し、該期日より五カ年間効力を有するものとす。もし右五カ年の終了に至る十二カ月前に、締約国の孰れよりも年協約を廃止するの意を通告せざる時は、本協約は締約国の一方が廃棄の意思を表示したる当日より一カ年の終了に至るまでは引続き効力を有するものとす。しかれども右終了期日に至り、同盟国の一方が現に交戦中なるときは本同盟は、講和結了に至るまで当然継続するものとす。⁹

日英同盟に対してロシアとその同盟国フランスは、3月16日に次の宣言を發した。

ロシア・フランス両国政府は日英同盟が、フランスとロシアが繰り返し述べてきた原則をその精神に盛り込んだことを喜んでいる。ロシア・フランス両国政府は、これらの原則が極東の利益を保証するものと信ずる。しかしながら、他の強国の敵意を含む行為を見失わないためには、あるいは中国で繰り返し混乱を起こし、中国の統合と自由な発展を妨げないために

⁹ 『外交文書・日露戦争』

は、互いにその利益を減じあうべきだ。それゆえ、これらの措置を講ずる権利を留保する、と。

これとの関連で外交喜劇が10月に上海で演じられた。そこでは新日英同盟が一部を演じた。中国当局の意思によれば、イギリスは7月31日に日本、ドイツ、フランスに対し、同4カ国が平和の回復された上海に駐留させていた軍隊を撤兵することを提起した。日仏はすべての国が支持することを条件に喜んで同意した。ドイツは共同撤兵の日時をまず決定すべきだという引き延ばし案を提起した。イギリスは11月1日と決定し、フランスは同調した。しかしながら、日本はある国に秘密の動きがあるとして引き延ばした。ついに日本は10月6日に、イギリスは8日に、ドイツが中国政府から揚子江流域における追加的権益を与えないよう保証を取り付けたことを知った。揚子江流域に対するイギリスの影響力は中国におけるドイツの政策をいつも困惑させてきた。ドイツの措置はイギリス以外の国に狙いを定めたものではなかった。イギリスの意図するものは、いかなる国にも中国との間で、最近結ばれた同盟と矛盾するような、排他的な秘密協定を結ばせないためのものであることをドイツに通告した。同時に中国政府はドイツにいかなる約束もしていない振りをした。この事件について、いまや日本から十分に示唆を受けたイギリスは、一部の国が中華帝国の一部についての保全を約束するのは、中国自身が望む協定でない限りは不要であり、望ましくないと宣言した。イギリスは慶親王に対しても二枚舌を憤った。他方、張之洞総督は、慶親王がドイツに対しても約束していたので、その要求を拒否した。ドイツはイギリスに賢明だが相手を納得させるには至らない説明で、この件を終わらせた。事態がはっきりしたので、日本は11月22日に大胆にも単独で上海から撤兵した。他の国々も従った。

日英同盟は、満洲についてのレッスンと中国政府との交渉のさなかに発表されたことを想起しよう。まず日英、そして露仏によって行われた重大宣言でもたらされた外交的突風のなかで、満洲交渉は一時的に忘れられ、1902年4月8日午後3時に発効する、東三省についての露中協定が結ばれ

たことに驚きの声が上がった。人々を驚かせたのは、その緩やかな条件であった。ロシアは満洲におけるロシアの鉄道、市民、企業を中国が守るという条件で領域から撤兵し、中国の主権を約束したのであった。撤兵は続く18カ月に3つの時期に分けて行われた。遼河西部は1902年10月8日までに、盛京省と吉林省は1903年4月8日までに、最後にアムール省（黒龍江省）は1903年10月8日までであった。

撤兵するまでは、満洲における中国軍の数と駐屯地は中露間の協議で決定するが、撤兵後は、中国軍は中国側の指揮により自由に配置してよい。しかしながら、いかなる変更についてもロシア政府は通知を受けるものとする。協定のうち日本に直接関わる条項は別として、満洲以外の中国領土については何も触れず、満洲についても新たな鉱山および鉄道開発への要求はなく、最後には全満洲を中国に返還することをロシアが約束するかに見えた。前の失敗した協定と比べて今回の穏やかな語調は、中国の領土保全に貢献する新たな露仏同盟の宣言の直後であることを思えば、極東におけるロシアの意図の誠実さを確認するように見えた。

この協定によれば、満洲占領の第1期は1902年10月8日に終わるはずであった。その日までにロシア軍は遼河西部にある盛京省から完全に撤兵するはずであった。しかしながら、いくつかの目撃談から判明したように、いわゆる撤兵とは、満洲鉄道に沿った広範なロシアの兵舎のなかへロシア兵を撤退させることを意味していた。満洲で最も重要な地点、すなわち盛京省と全吉林省は、協定によれば1903年4月8日撤兵とされていた。その日が到来し、過ぎた後にも、いくつかの場所を除けば、名目的な撤兵さえ見られなかった。憂慮のなかでロシア軍は中国外交部に宿泊し、未遂の撤兵の代償として7カ条の新要求を出して外交界を驚かせた。要求の実質は以下のごとくである。①満洲のいかなる部分をいかなる国にも割譲しないこと。②牛莊・北京間にロシアの電信線を建設すること。③いかなる口実であれ、華北では外国人を雇わないこと。④牛莊税関の管理を露中銀行に委ねること。同港における検疫をロシアが監督すること。⑤満洲

で外国貿易のために、新港や市場を開かないこと。⑥モンゴル行政の現状を維持すること。⑦暴動〔義和団〕の前にロシアが享受していたすべての特権に影響を及ぼさないことを中国が約束すること、である。内田公使は4月21日に北京外交部に強い抗議を行い、英米の公使がこれに続いた。満洲で2つの新港を開港する交渉を中国と進めていた米国は、輸入においてはいかなる国よりも大きな利益を上げていたが、4月24日に報道された要求について本物かどうかをサンクトペテルブルグに直接聞いた。ロシア外相もカッシーニ公使 Minister Cassini も、ロンドンのロシア代表によって書かれ、提案された協定なるものは、完全に不正確であったと米国に保証した。ロシアの否認が最終的なものであるかに見え、外交的成功ぶりは、ヘイ長官 Secretary Hay によって確認された。しかし、報告された記事が不正確というのは、全体的に根拠がないとか、その一つ一つが正しくないというのではない。ロシア皇帝政府は中国当局と予備交渉を進めていただけでなく、噂された条項を否定しなかったのであるから、推測の余地を残していた。しかしながら、ロシアの要求を知ると、中国の指導層のなかに、日清戦争や義和団事件当時でさえ見られなかった愛国行動が覚醒したことは注目し値する。18省からの義援金を通じて、北京政府が強く再認識させられたのは、満洲の喪失は帝国に広範な蜂起をもたらし、1900年の排外的十字軍を繰り返すならば、中国は反乱と列強によって分裂し、支配王朝も崩れるという危機感であった。この注目すべき騒乱において商人と学生は日本滞在の者も含めて、役人や知識人よりも少なからず積極的であった。役人たちは支配階級として、政府の利益と中国文明に対して通常は最も敏感であった。この状況にあっては5月10日に北京外交部がロシア政府に答えて、前の協定で無視した要求を確認し、中国は決して破らないとしたのは、不思議ではない。

ロシアに対する中国の返答は、10日前にロシアがアメリカに穏やかに否定したことよりも問題解決に役立つことはなかった。それどころか、慶親王とその外交部は交渉全体を通じて力負けして、1カ月は試行錯誤が続い

た。露清銀行の有力な北京代表たるポコティロフ Pokotilov は外交部と宮廷の一部メンバーに贈り物と賄賂を使ったと報道されたが、ロシア代理公使プランソン Russian chargé Plançon は 7 カ条の 3 つに即答を求めた。それは満洲の領土を割譲せず、新港を開港せず、モンゴルの現状を維持するものであった。慶親王は皇后とともに、待つ、あるいは少なくとも時間を稼ぐように見えた。一部の愛国者によって最も尊敬された張之洞総督を外交部に入れる試みは失敗し、日本政府の態度は中国が再び決定的な態度をとるよう鼓舞するには十分でないように見えた。他方、ロシア公使レッサーは 1 日留守したのち、5 月 29 日に北京に戻り、外交部が外交的秘密をししばしば漏らしたことを厳しく叱責した。6 月 10 日、慶親王との会議で 7 カ条の新要求を出した。しかしながら、そのいずれもが、前と同じく拒否されざるをえなかった。レッサーは、無差別の拒否は中国に重大な不利をもたらすものであるとほめかし、相互の利益のために古い要求に代替する条文の作成を試みた。親王はロシア皇帝の公使に対して代替物を要求するほかなかったが、皇太子には代替物の持ち合わせはなかった。そこで新たな要求が提示されたが、それは前の協定の第 1、第 4、第 6 カ条に該当するものであり、第 4 条はいまや 2 カ条に分けられた。慶親王は 5 日待つことを頼み、一時的に世界から身を隠して、レッサーとの交渉を秘密の通信員に委ねた。日本、アメリカ、イギリスの公使からの抗議は、満洲に新港を開くという日米からの修正要求とともに、無視された。

満洲情勢とともに日本をいらだたせたのは、韓国で直面していたより深刻な事態である。1894～95 年の戦争以後の韓国の外交史を簡単にみておこう。1895 年から 1898 年の間に、韓国におけるロシア人と日本人による暴行が目撃された。日本は改革に熱心であり、少なくとも 1895 年 10 月 8 日の閔妃殺害事件¹⁰に際しては、ロシアの妨碍と外交に抗しなくてはならないと

¹⁰ 乙未^{いつび}の変とも呼ぶ。1895 年朝鮮の李朝 26 代高宗 (李太王) の妃である閔妃 [1851～1895] が日本人に暗殺された事件。閔妃は大院君を引退させ、清国に従属する事大主義をとり、日本に対抗した。日清戦争後 1 時退けられたが、3 国干渉の

いう、日本には責任のない要素によるものであるとした。機敏なロシア公使ウェーバーが去って行くまえに、中国におけるロシアの活動が独占的になってから、日本の影響が浸食されるようになった。この闘争期間に、ロシアと日本は韓国における立場を規定する3つの協定を結んだ。すなわち、1896年5月4日にソウルで署名された小村・ウェーバー覚書 Komura-Waeber memorandum、1896年6月9日にサンクトペテルブルグで署名された山縣・ロバノフ議定書 Yamagata-Lobanov protocol、1898年4月25日に東京で署名された西・ローゼン議定書 Nishi-Rosen protocolである。これらの協定の条項のうちいくつかの永続的なものは注目に値する。それらは戦争前の1903～4年にロシアとの交渉の前提として日本に提起されたものである。両国政府は「韓国の主権と独立を認め、韓国内政への直接的干渉をやめることを相互に約束した」。軍事教官や財政顧問は互いに相談することなしに派遣してはならない。韓国における日本の商工業企業の大きな発展に鑑みて、ロシア政府は日本・韓国間の商工業の発展に干渉しない。もしさらに原則的あるいは具体的協議が必要になれば、両国代表は友好的に交渉する。これらの協定はその性質からして臨時的であり、条項が厳密に守られたとしても新たな修正を要する。

満洲でより自由になると、ロシアは野心的なソウル代表パブロフ Pavlov と半官半民の外交家ギュンツブルグ男爵 Baron Günzburg とゾンターク嬢 Miss Sonntag が、半島で日本の影響をなくし、ロシアの影響力を拡大する、韓国固有の事情に適した手段を執拗にとりはじめた。この目的のために、ロシアは韓国宮廷に考えられるかぎりのほとんどすべての提案を行ったが、そこには南の馬山浦、鎮海湾、巨済島の割譲、北の電信・鉄道の建設、ロシア人財政顧問と軍事教官の雇用が含まれる。しかしながら、1903年4月には、北京に圧力をかけたのと同時に、ロシアは1896年に確保したといわれる林地の割譲を始めた。そのときに韓国国王はソウルの

のち台頭し親露政策をとった。このため日本公使三浦梧楼指揮下の安達謙蔵ら日本人壮士に王宮内で殺された。

ロシア公使館に避難していた。5月初めに、林地防衛という理由で47名のロシア兵が鴨緑江の龍岩浦に着いた。そこでは韓国政府の抗議にもかかわらず、広範な土地が囲われ、砦作りが始められた。やがて100～200名のロシア兵が到着し、前線の満洲側には新兵が安東と鳳凰城に入り、ロシア軍の圧力は韓国国境に重くのしかかった。

ついに、日本政府は韓国における独立と改革だけでなく、満洲における中国の領土保全を打ち立てるために、そして日本とロシアの権益を明確化するために継続的に深い脅威を与えられている極東の全面平和を根本的に勝ち取るために、ロシア皇帝政府と直接交渉すべきだという結論に達した。その主旨は、閣僚と枢密院が6月23日に奏上するずっと前に、報道を通じて明らかになっていた。そして、ロシアとの交渉の明確な方針が決められた。この交渉はロシアによって遅延したが、日本はかくも重大な問題に直面することは史上なかったので、注目すべき忍耐力で処理した。政府もまた、東洋の直接的平和が交渉に依存することをよく知っていたので、威厳と思慮をもって行動した。これらの交渉における日露の異なる動きとそれを進める異なる精神は、やがて外交関係が悪化していたそれぞれの政府の公式声明によって分かる。ペテルスブルグのロシア外交部による1904年2月9日付の声明はこう述べている。

「昨年〔1903〕、東京の内閣は、国力〔軍事力〕の均衡を確立し、太平洋岸の秩序を安定させるという口実のもとに、〔ロシア〕帝国政府に韓国との現行条約を修正する提案を行った。ロシアは同意して、アレクセイエフ総督 Viceroy Alexiev は東京駐在のロシア大使と協力して日本との間に新たな理解を描くよう命じられ、日本との交渉を委ねられた。東京の内閣との意見交換は友好的であったが、日本社会や内外のマスコミは戦争気分を煽り、政府をしてロシアとの武力紛争に引き込もうとした。この影響下で東京の内閣は交渉における要求をますます拡大し、同時に国の戦争準備のために、広範な措置を講じている。

「これらすべての環境はむしろ、ロシアの平静を攪乱するものではないが、

しかし陸海の軍事的措置を招く。にもかかわらず、極東の平和を保つには、ロシアは議論の余地のない権益の許す限り、東京の内閣の要求に必要な注意を払う。そして、韓半島における日本の商業的・経済的特権を認めることを宣言し、韓国で混乱が生じた場合には軍事力で権益を守る。同時に、韓国に関わる根本的政策を厳格に守りつつ、韓国の独立と統合は日本の理解と列強との条約によって保証されるとして、ロシアは3カ条を主張した。**①**この原則を相互間で無条件で保証すること、**②**韓国のいかなる部分をも戦略目的には用いず、外国によるそうした行為の正当化は韓国独立の原則にもとること、**③**韓国海峡の完全な航行権を保持すること、である」。

「しかし、この意味で練り上げられたプロジェクトは日本政府を満足させるものではなかった。日本は最後の提案で、韓国独立を保証するかに見える条件の受け入れを拒否しただけでなく、同時に満洲問題がらみのプロジェクトでその条項を主張していたのである。日本側のその要求は、当然認められず、満洲におけるロシアの立場の問題はまず中国と関わるだけでなく、中国において経済的利害をもつ列強と関わっていた。それゆえ、帝国政府はロシア軍の占領地に関わる韓国問題をめぐって日本と特別な条約を結ぶ理由は絶対になかった。しかしながら、帝国政府は、満洲占領が続くかぎり、満洲における中国皇帝の主権と中国との条約を通じて列強が得た権益を認めることを拒否できなかった。この効果についての宣言はすでに外国政府によって行われていた。この見方からして、帝国政府が東京の代表に日本の最新の提案に応えさせたあとで、東京政府が上述の考慮をいれ、ロシアの意思を評価して日本との平和的理解を期待することが正当化された。その代わりに日本政府は、この返答を待つまでもなく、交渉をやめて外交関係を棚上げすることを決定した。帝国政府はそのような行為の帰結についての全責任を日本に負わせながら、事態の発展をまち、必要なときがくれば、極東の権益の保護のために最も決定的な措置をとるであろう。」

2月8日夜の日本の外務省の公式声明は以下のごとくである。

「韓国の独立と領土保全を維持することは日本の福祉と安全に不可欠で

あり、韓国の最高の利益を守るために、日本政府は韓国の立場を危うくするいかなる行為にも無関心ではありえない。しかるにロシアは、中国との真剣な条約と列強に対する再三にわたる保証にもかかわらず、満洲を占領しただけでなく、韓国領土にも攻撃的な措置をとった。万一、満州がロシアに併合されたならば、韓国の独立は当然に不可能である。それゆえ、日本政府は東アジアの永続平和を願って、ロシアとの直接交渉を通じて、満洲と韓国の相互の利益を友好的に調整するために、7月末に向けてロシア政府との間に最後の対話を行い、フランスを招待した。これに対してロシア政府は同意を表明した。そこで、8月12日、日本政府はロシアに対してサンクトペテルブルグ代表を通じて、協定のたたき台を提起したが、以下のごとくである。

①中国と大韓帝国の独立と領土保全を相互に尊重すること。②当該国民とすべての国民に対する商業と産業の機会均等の原則を維持することを相互に約束すること。③韓国に対する日本の死活的利益と満洲におけるロシアの鉄道における特殊な利益とを相互に認めあうこと。日本とロシアは第一条の原則に矛盾しない限り、上述の利益を守るために、必要な措置をとる権利を相互に認め合うこと。④韓国に忠告と援助を行う排他的権利をもつことをロシアが認めること。⑤ロシアが東支鉄道と山海関・牛莊線とを結ぶために、韓国鉄道を南満洲まで延長することに干渉しないことを約束すること、である。

「会議はサンクトペテルブルグでロシア当局と行うことが日本政府の元来の意図であった。問題解決にできるかぎり速く到達したいからである。しかし、ロシア政府は、皇帝が外国旅行を計画しているという理由で、それを断固として拒否した。もう1つの理由は、交渉を東京で行うと決定することが避けられなかったことである。ロシア政府が反対提案を行ったのは、10月3日である。ロシアはそこで中国の主権と領土保全の尊重し、中国におけるすべての国民の商工業の機会均等の原則を保持することを考えて、満洲とその沿海地は日本の権益外であることを宣言するよう要求した。ロ

シアはさらに韓国における日本の自由に対していくつかの制限を加えた。たとえば、必要なときに日本が韓国における利益を守るために軍隊を派遣する権利は認めたが、韓国のいかなる地域をも戦略的目的で使用することは拒否した。実際には、ロシアは北緯39度線の北に中立地帯を提案しさえした。」

満洲を吸収する意思はないと告白したロシアが、中国の主権と領土保全を尊重する原則を繰り返し述べているこの条項を協定に書き込むのを避ける理由を日本政府は完全に見誤った。さらに言うならば、ロシア政府側の拒否は、日本政府にその条項の書き込みの必要性をさらに印象づけたのだ。

日本は満洲に重要な商業的利益をもち、将来の発展に少なからぬ希望を抱いている。政治的には日本は満洲と韓国の関係により大きな利益をもち、そのため、日本は満洲を完全に日本の利益の外にあるものとは認識できない。これらの理由こそが日本がロシアの提案を拒否した理由である。

したがって、日本政府はロシア政府に対して前述の観点を説明し、同時にロシアの反対提案に必要な修正事項を加えた。中立地帯については、日本は満洲・韓国間の両側に同じ幅、たとえば50キロ米幅のものを作べきだと提案した。東京で議論を重ねた後、日本政府はついにロシア政府に10月30日付で修正案を提起した。日本政府はそれからロシア政府が早く返事をするよう督促した。しかし、返事はまたも遅れ、12月11日ようやく届いた。その返書でロシアは、中間地帯とともに、韓国だけに適用される協定の条項は削除し、韓国領土を戦略的目的に用いないこととする、元の要求を堅持した。しかし、協定案からの満洲の除外は、交渉の元来の目的（それは満洲と韓国における利益の友好的調整によって紛争を除去するものであった）とは反対のものであり、日本政府がロシア政府に韓国領土の使用についての宣言を取り除くことを提案したものであった。中立地帯全体の削除は、満洲における中立地帯の建設にロシアが反対ならば、韓国にも建設すべきではないというものであった。

ロシアの最終回答は1月6日に東京に届いた。この回答でロシアが協定

案に次の条項を書き込むことに賛成したのは確かである。日本は満洲と沿海地域は利益の範囲外であることを認めるが、他方、ロシアは居留地の建設を除いて、同省内で日本や他の国が中国との現行条約で獲得した権益や特権に干渉しない。しかし、この提案は、韓国領の中間地帯条項を維持すること、韓国領土を戦略目的には用いない条件である。すでにロシアに十分に説明したことだが、これは日本にとって受け入れられないものであった。満洲における中国の領土保全については、何の言及もなかった。ロシアがいま提起した約束が満洲における中国の領土保全について明確に規定しないかぎり、実際的な価値のないことは自明であろう。条約上の権利は主権においてのみ、共存するからである。その結果、ロシアによる満洲の吸収は、中国との条約によって列強が獲得した権益と特権を無にするものとなった。日露間の交渉と外交関係全般は2月5日に日本によって切り裂かれた。これをもって外交は戦争に進んだ。